

「京都市立工業高校将来構想委員会 中間まとめ」に対する市民意見募集の結果概要（案）

1 実施期間

平成24年10月22日（月）から平成24年11月12日（月）まで

2 実施主体

京都市立工業高校将来構想委員会（以下、「委員会」という。）

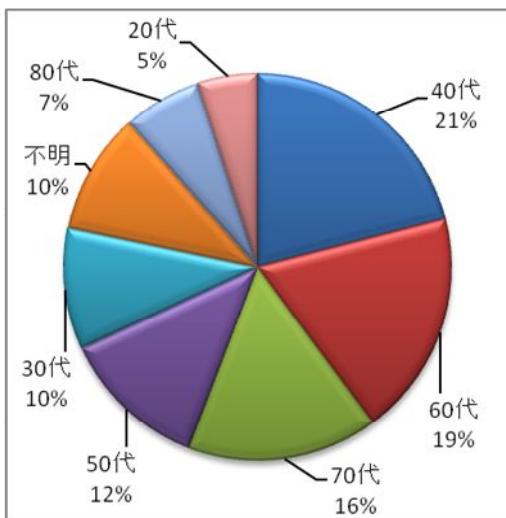
3 意見提出件数

138件

4 御意見をお寄せいただいた方の属性

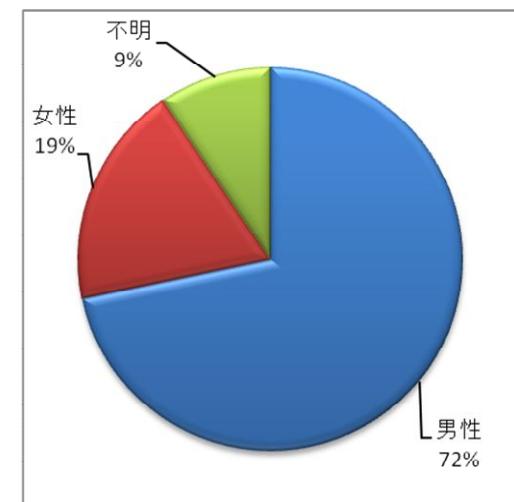
＜年齢別＞

年齢	件数	割合
10代	0件	0%
20代	7件	5%
30代	14件	10%
40代	29件	21%
50代	17件	12%
60代	26件	19%
70代	22件	16%
80代	9件	7%
不明	14件	10%



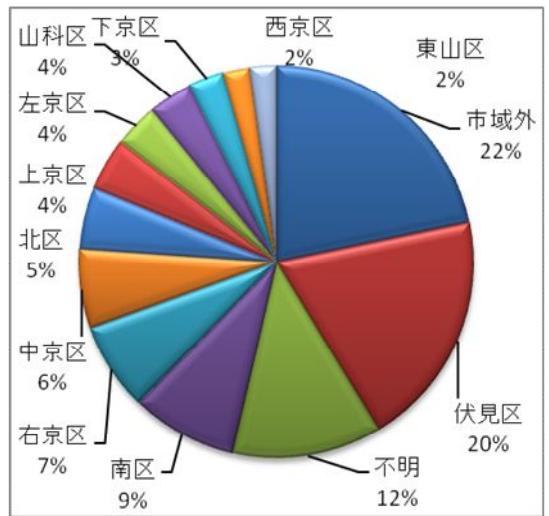
＜性別＞

性別	件数	割合
男性	99件	72%
女性	26件	19%
不明	13件	9%



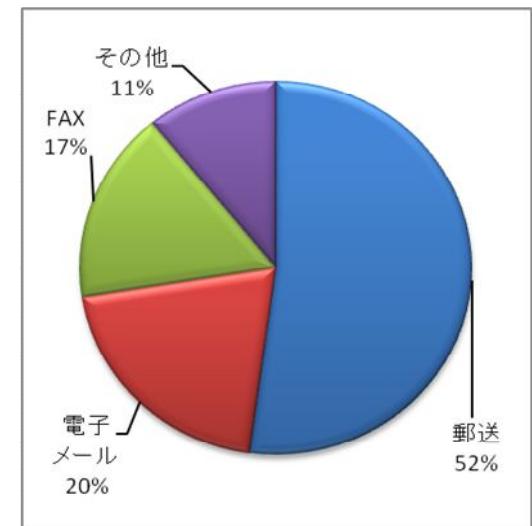
＜住所別＞

行政区	件数	割合
北区	7 件	5%
上京区	6 件	4%
左京区	5 件	4%
中京区	9 件	7%
東山区	3 件	2%
山科区	5 件	4%
下京区	4 件	3%
南区	12 件	9%
右京区	10 件	7%
西京区	3 件	2%
伏見区	27 件	20%
市域外	30 件	22%
不明	17 件	12%



＜提出方法別＞

提出方法	件数	割合
郵送	72 件	52%
FAX	23 件	17%
電子メール	28 件	20%
その他	15 件	11%



5 主な御意見の概要とそれに対する委員会の見解・考え方について

※ 同趣旨の御意見については一つにまとめている場合があります。

I 「最終まとめ（案）」の本文に趣旨を反映した御意見、又は、同様の趣旨が既に「中間まとめ」の内容に盛り込まれている御意見

◆ 第1章 市立工業高校に対する基本認識

御意見の趣旨		委員会の見解・考え方
1	京都の「ひと」、「まち」、「くらし」、「地場産業」を支える中堅技術者を育成するために工業高校は必要であり、存続を望む。	産業社会をめぐる状況が激変する中ではあります、市立工業高校には、従来の工業高校の特徴でもある資格取得や実習等を通じた特定の専門性・技能の向上だけではなく、既存の概念を超えて、総合性を帯びたものとして変質する「ものづくり」の担い手を育成し、社会の発展のために果たしていくべき重要な責務があると考えます。
2	現場や製造過程を担う人材を育てる高等学校は是非必要。	
3	平常時だけではなく、災害発生など非常時において社会を支える「ものづくり」の大切な部分を考慮し、防災機能の強化や社会資本の再構築を担う技術者養成が必要。	
4	「ものづくり」は日本立国の最大の原動力であり、その「ものづくり」を通じて、「生きる力」を育てることは普通科高校にはない工業高校の強み。	

◆ 第2章 次代の「ものづくり」の担い手を育成するために

御意見の趣旨		委員会の見解・考え方
1	中学生が自発的に進学を希望し、入学後も「この学校を選んで良かった」と感じる学校とすることが大前提。	「市立工業高校で将来を見据え育むべき資質や能力について」は、グローバル化をはじめとした産業社会の変化に対応するために、基礎学力の定着や英語教育の充実、新たな価値の創造を視野に分野を横断する総合的教育である
2	「ものづくり」が好きな生徒、普通科への進学が学力的に難しい生徒、高校卒業後に働きたい生徒にとって工業高校は必要なものである。	
3	基礎学力を重視し、全体を引き上げていくことが今の高校教育には必要。	

4	生徒の多様な進路に対応し、将来的に幅広く応用することが可能となるように、基礎基本をしっかりと教えつつ、実習に加えて数学・物理・情報等の理論も重視しなければならない。	STEM 教育の趣旨を指導領域に加えることが必要であると考えます。同時に、部活動や地域活動等を通じた人間教育により、コミュニケーション力等の社会人として必要な素養を身につけることも必要であると考えます。
5	工業高校では3年間で専門科目にしっかりと取り組み、資格取得等を通じて技術の習得に努めるべきである。	
6	最近の「ものづくり」は様々な力が集まってなされる印象がある。実習から学問的背景への発展深化まで総合的に学ぶことのできる環境で STEM 教育を推進し、リーダーシップ溢れる生徒が集う学校とすべき。	
7	問題解決のための探究能力、進取の気性をもった「新たな創造」を使命とした「ものづくり教育」を実践する、早期工学人材育成に向けた学校への転換に期待したい。	
8	産業のグローバル化への対応として、英検受験や英語の授業時数の確保といった英語教育の充実とともに、留学生の受け入れや海外の製造現場や教育機関での実習など魅力的で体系化された教育内容のもと、社会のニーズに応える姿勢や責任を自覚させるべき。	
9	クラブ活動や地域活動等を通じた人間教育の実践を通じて、ソーシャルスキルやコミュニケーション力の向上など社会人として必要な素養を身につけ、将来を担う人材育成に努めてほしい。	
10	「ものづくり」に適した資質をもった人材を入学させられるかを考慮する必要がある。	
11	「ものづくり」における女性の活躍は必要であり、女子生徒に焦点を当てた取組を推進すべき。女子生徒の視点にたった部活動や教育環境の充実を求める。	
12	伏見工業高校昼間定時制は、成果もあるが、設置趣旨とは異なり、問題行動の多発など多くの課題を抱えることになっており、もはや定時制課程である必要はない。現在、京都府が柔軟な教育システムを有する単独高校の設置を表明しているため、伏見工業高校昼間定時制は一定の役割を終えることになる。平成27年度以降は生徒募集を行わないことを求める。	昼間定時制については、設置当初の趣旨が十分浸透せず、目的意識が乏しい生徒が多く入学する実態があることを踏まえ、京都府の動向を見据え、早期に京都府・京都市間で十分協議し、そのあり方を見直すべきと考えます。
13	「教員の資質向上」を重点項目として位置づけるべき。現有の教職員は、大学院や企業との連携による技術	市立工業高校の教育を支える指導者のあり方

	研修等を通じて常に進化する産業界に目を向け、時代の先端を担うスキルを身につけていくべき。	14 民間企業との人事交流による教職員研修の実施や企業等の開発担当者を指導者として招聘するなど、国内外を問わず大学や企業の研究所等との連携による指導者の人的方策を講じるべき。	については、「ものづくり」の将来を担う有為な人材を育成する学校づくりを進めるうえで不可欠な要素なため、御意見の趣旨を踏まえ、「最終まとめ」の第2章の本文に反映します。
14	民間企業との人事交流による教職員研修の実施や企業等の開発担当者を指導者として招聘するなど、国内外を問わず大学や企業の研究所等との連携による指導者の人的方策を講じるべき。		

◆ 第3章 今後の「ものづくり」を見据えた市立工業高校のあり方

御意見の趣旨		委員会の見解・考え方
1	「ものづくり都市・京都」を支える即戦力として期待される職業人を育成するため、教育の内容及び場所の観点から、大学や研究機関、先端技術を有する企業との有機的なつながりが必要。	市立工業高校は、将来を見据えると、地域や企業、研究機関等との効果的な連携により『ものづくり教育の場』としての役割、「ものづくり」の『生涯学習の場』としての役割を果たすなど、社会全体で「ものづくり」人材の育成を支える機能を担うべきであると考えます。
2	幼稚園・小学校・中学校時代から「ものづくり」への興味関心を喚起するために、一般市民等が休日にも「ものづくり体験」が可能な「ものづくりセンター」を学校内に設置すべき。	
3	実務的な工業技術の学習の場、生涯を通じて学び続けるための新たな学習の場としての役割を市立工業高校が果たしてほしい。	
4	公共の施設設備のあり方として、生涯学習の充実や小中学生への興味喚起に資することは重要であるが、そのためには整備の経済的裏付けや施設設備の管理体制の確立が必要である。	
5	「工業高校=就職」のイメージが強い中、勉強すれば大学進学も可能という選択肢は生徒にとって良いこと。	大学進学へのニーズの高まりを受け、大学における工学教育への接続を見据えなければなりません。
6	これまでのように職工の中核となる人材を育成するだけではいけない。上位志向をもつ生徒が多い中、大学の学びにつながる高校が必要。	

◆ 第4章 市立工業高校の施設・設備の整備と学校規模

御意見の趣旨		委員会の見解・考え方
1	老朽化や耐震性の問題を解消するため、新しい校舎の整備が必要。	
2	多様な学習活動や部活動の活性化を考慮すると、1学年6学級から8学級は必要。	
3	歴史と伝統がいくらあっても既成概念にとらわれない新しい試みが必要。財政の低減化を図りつつ、2校の専門教育の特性を融合し、「ものづくり」教育の場としてバランスのとれた社会人、産業界を担う人材育成を図るため、1校に統合することは現実的。新しい施設や先端設備、優秀な指導者や新しい教育内容を有する科学技術立国日本が誇る新しい工業高校としてほしい。	
4	新たな場所に新たな学校を設置し、新たな施設設備のもとでスタートができれば、中学生がこの学校で学びたいという意欲や教員が意欲的に働く意義を湧き立たせることができるのでないか。	市立工業高校の学校規模については、現在の両校の生徒数は平成元年と比べて約半数の350名となっている中で、専門委員である両校の校長からも、教育活動を円滑に進めるためには現在より大きい規模が望ましいとの発言があり、それを含め、全国的な状況等を総合的に勘案して適正規模を1校1学年あたり240名から320名としました。なお、記載にあたっては、1学級あたりの生徒数を国が定める標準人数である40名を指標として使用していますが、きめ細かな教育のもと確かな技術を学ぶという工業高校の特性を踏まえ、現在と同様に1学級30名程度での学級編成とされるべきであると考えます。
5	最小の経費で最大の効果を生み出すことが大切。2校を維持し、切磋琢磨することも有意義であるが、施設の老朽化対策が経済的に困難であれば、統合もやむを得ない。生徒たちのために時代に沿った環境整備を期待したい。	また、「学校規模」や「財政状況等を踏まえた施設整備への効率的な投資」の観点からの2校の再編については、限られた行政資源を効率的・効果的に活用し、生徒にとってより充実した学びの場となるよう両校の優れた部分を活かしながら統合することが望ましいという趣旨で提示しております。
6	再編の背景としてコスト面への課題が掲げられているが、教育は投資であり、基本構想に基づく理念と実現への実行継続こそが将来的に成果を生みだす。	
7	最新の工業技術を学ぶことができるよう、設備の更新が容易な施設構造とすべき。	

◆ 今後の京都市立工業高校の発展に期待する御意見

今回の市民意見募集では、今後の市立工業高校の発展に期待いただく御意見が寄せられました。

御意見の趣旨	
1	市立工業高校そのものに対するニーズを根本的に問い合わせるための絶好の機会である。
2	「中間まとめ」に内容には納得している。理想とする工業高校が実現できるよう知恵を絞って前進させてほしい。
3	さらに誇らしい校風を継承された新しい学校に「我が母校」と訪れることができる、応援できる工業高校にしてほしい。
4	部活動で人間教育をしていけるよう文武両道の魅力ある新しい工業高校を再構築してほしい。
5	洛陽・伏見のどちらを残すかという狭い視野ではなく、従来の発想や古い考えに固執することなく、「ものづくり」を担う人材を新しい工業高校でしっかりと育ててほしい。
6	工業高校から日本の未来を担う技術者が生まれるよう頑張ってほしい。
7	産業界を支える裾野の広い人づくりを担ってきたこれまでの良き伝統を継承し、モデルとなる学校となるよう期待。
8	ものづくりの最先端で活躍していけるような力を身につけることができる学校にしてほしい。
9	生涯を通じて学び続けるための新しい学習の場としての工業高校を目指してほしい。
10	工業高校から大学に進学することの意義は、工業高校で培われた基礎的技術と工学的センスを大学の工学教育の中で継続的に磨き、発展させることにある。
11	汚い、暗いイメージがある工業高校に中学生が希望や目標をもって進学するためには、魅力ある施設が必要。
12	先進的な工業高校の設立について基本的には賛成。新しいタイプの工業高校には充実した設備と優秀な指導者、新しい教育方法が不可欠であり、既存概念を変える必要がある。
13	改革は急務であり、速く再編すべき。
14	少子化や大学進学率の向上等の社会情勢や産業社会の変化、京都市財政を考慮すると、再編は避けられない。
15	技術革新を引き起こす人材のキャリア形成のためにも、工業高校2校を再編し、充実させが必要。
16	工業高校として課題や問題点が多くある中、提言内容を実現し、両校の優れたところを活用すべき。
17	時代にあった技術や技能を育てる工業高校としてリニューアルしていくことは大切。2校の良いところを持ち寄って、経費も節約しながら素晴らしい工業高校をつくる発想は現実的。

18	両校の専門教育の特性を生かし、ものづくり教育の場としてバランスのとれた社会人、産業界を担う人材育成のため、1校に統合すれば良い。
19	統合による新しい工業高校が素晴らしいものとなるよう期待したい。
20	2校を1校にし、早期に日本一の工業高校としてほしい。
21	再編統合されるのであれば、新しい校舎で先端設備を有した科学技術立国日本に誇れるスーパー工業高校としていただくことを望む。

II 上記以外の幅広い御意見

以下の御意見につきましては、委員会の「最終まとめ」を受けて、京都市教育委員会が具体的な事項を検討する際に改めて参考にしていただきたい。

御意見の趣旨	
1	若手中間技術者を絶やさないでほしい。
2	「就職率100%」が誇張され、本質的な改革につながらないことが懸念される。
3	工業高校は、資格取得における要件において有利である。
4	STEM教育の趣旨に基づいた授業展開は有効であると思うが、現在の非正規教員中心の指導体制では実現は難しい。
5	工業高校では3年間で専門科目にしっかりと取り組み、資格取得等を通じて技術の習得に努めるべきである。
6	専門分野のスキルアップばかりでなく、部活動など普通科と同じように楽しく充実した高校生活を送れるような学校づくりを進めてほしい。
7	全寮制の学校とし、全国から生徒募集をすべき。
8	中学校3年生及びその保護者に対する営業戦略がない。工業高校は普通科の予備軍であってはいけない。
9	市立工業高校が将来的に担うべき機能として提言されている内容は、本来、大学や公的機関が担うべきであり、現在の市立工業高校の施設設備及び教員では実現不可能。
10	幼稚園から高校までの一貫教育体制による科学技術教育を検討すべき。とりわけ、高校段階では、工学系大学進学コースを含む「スーパー技術ハイスクール」が必要。
11	大学進学を視野に入れた科学技術系の新たなタイプの学校など、進学する者にとっても魅力的な学校とすべき。「ものづくり・まちづくりを通じて就職を目指すコース」、「理工系大学への進学を目指すコース」、「部活動の活性化を目指すコース（スポーツ系）」を融合する全国唯一の内容を有し、「知・徳・体」のバランスのとれた新しい専門高校とすべき。

12	高校・大学の一貫教育体制や大学への編入システム等の検討が必要。
13	高校は大学の予備校ではない。
14	大学進学希望者のためのクラスは不要。卒業年限選択制を導入し、大学進学希望者は卒業を1年延期し、その期間で進学に備えることができる制度を構築すべき。
15	3年課程と5年課程を並立させるなど、基礎理論から応用理論に至るまでの高度な科学技術を学ぶ機会を若者に提供すべき。
16	堀川高校や西京高校とは別の魅力をもつ学校とすべき。
17	文部科学省が少人数教育の有効性を認めている中、それに反する内容とすべきでない。多様な問題を抱えた生徒や保護者が増加する状況下では、学校規模を確保するよりも、2校を維持し、少人数で内容を充実させ、ゆとりある学校とすることが必要。
18	例えば、「ものづくり」と「環境」をテーマにグローバルな見方ができるようにするなど、従来の学科を付合させるだけでなく、技術革新を引き起こす人材のキャリア形成を視野に、新しい工業高校のあり方、目標、コンセプトを創造し、充実させていくことが必要。
19	全日制2校を進路選択の目的別に再編してはどうか。1校はSTEM教育の趣旨に基づいた教育によるスペシャリスト型技術者の育成を目指し、理工系大学進学を目的としたもの。もう1校は国家資格や技能検定の取得を通じたテクニカル型技能者の育成を目指し、就職を目的としたもの。生徒一人一人が生き抜く軸を育むためには、目的を分散させるよりも集中させるべきである。
20	工業高校が1校に統合されるのは不安だが、仕方がない。しかし、中学生の進路を考慮し、必要な定員は確保すべき。
21	伏見工業高校を残してほしい。
22	交通アクセス、知名度、敷地面積等を考慮し、新しい工業高校を伏見工業高校の地で開設してほしい。
23	洛陽工業高校を残してほしい。
24	工業高校2校を存続させ、各校が担う領域を差別化し、特色化を図ることで、将来を見据え、広範囲にわたる「ものづくり」に対応すべき。
25	京都らしさを生かす議論が欠けている。最初から統合ありきという印象を受ける。
26	「将来構想=2校の再編による合理化」など、発想が全てネガティブ。
27	時代の要請に合わず、万策尽きたのであれば、京都市立工業高校は2校とも廃止すればよい。
28	2校の再編にあたって、これまでの2校の独自性が失われないか心配。

29	工業高校以外の市立高校を含めた統廃合をも視野に入れているような表現には強い危惧をもつ。再編、統廃合にあたっては、まずは理念や目的を明確化しなければならない。そのうえで、具体的な内容については、教員や保護者等からの幅広い意見聴取と議論を踏まえなければ大きな混乱を招く。
30	伏見工業高校昼間定時制が募集停止になること、塔南高校と洛陽工業高校の一部が統合して工業系の進学校へ、洛陽工業高校の一部と伏見工業高校が統合して新しい工業高校へ改編されることが決まっていると聞くが、これは事実か。
31	「ものづくり」よりも経済効率の観点から再編が提示されているように感じる。財政負担を理由とした再編には反対。京都市が2校の工業高校を維持できないとは思えない。両校ともに施設、設備を更新、充実し、注目に値する学校としてほしい。
32	両校ともに卒業生は出身校名が失われてしまうことに抵抗があると思う。校名を残してほしい。
33	校名については、市立工業高校が新たな飛躍を遂げることを広く知っていただくためにも、両校の名前は残さず、新しい名称とすべき。
34	建設工学を学ぶ環境を存続させてほしい。
35	軽度発達障害の生徒への対応のため、特別支援教育士の有資格者の配置が必要。